

## JICA 教師研修 学習指導案・授業実践報告書

### 【実践者】

氏名	松村 駿	学校名	群馬県 私立 ぐんま国際アカデミー 中等部
担当教科等	国語	対象学年(人数)	7年 A組 (23名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2022年 9月 ～ 11月 (15時間)		

### 【実践概要】

1. 実践する教科・領域： 国語・総合	
2. 単元(活動)名：多文化共生～世界に生きる私～	
3. 授業テーマ(タイトル)と単元目標 授業テーマ：「構成を工夫することによって、様々なアイデンティティをもつ人々の視点への気付きや共感に対する(読者との)コミュニケーションを深めることができる。」 単元目標 スキルベース：①意味段落の役割を理解し、自分の意図に応じて段落を付けられるようにする(読者に自分の主張が効果的に伝わること) ② 主張に対する根拠を明確にして述べる ③ 序論・本論・結論に正しく分けられるようにする 概念ベース：① 「自分自身」という存在に対する理解を深める ② 多様な文化で生きるために <u>必要なこと</u> を考え、自分なりに結論付ける 関連する学習指導要領上の目標：筋道立てて説明する力を養い、自分の思いや考えを確かなものにするようにする。	
4. 単元の評価 規準	①知識及び技能 (1)ウ：語句の量を増やすとともに、語感を磨き語彙を豊かにすること
	②思考力、判断力、表現力等 ・意味・形式段落の役割を理解し、文脈と意図に適した形で使用している ・自分の意見や考えを読者に伝えるために、 <b>第三者の視点を踏まえて</b> 根拠を適切に記述している ・文章を序論・本論・結論の三つに、適切に分けられている
	③学びに向かう力、人間性等 ・(国籍に縛られず)異なる考えを持つ人たちを様々な視点を持って見ようとしている
5. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、	<b>【単元設定の理由】</b> ・SDGsを学ぶための一歩目として、本単元を作成した。 <b>【単元の意義】</b> ・SDGsやその他社会課題について知り、行動するための土台となる「自分自身」に対する理解を、書くことを通じて深めていく。

指導観)	<p><b>【児童／生徒観】</b>          当校ではイマージョン教育を導入しており、全教員の約半数が外国人ということもあり、海外の文化を身近に感じながら日々を過ごしている。学年の中には、外国籍を持った生徒や、海外での生活年数が豊富な生徒が何名かいる。</p> <p><b>【指導観】</b>          本単元は、スキルベース、概念ベースと二つの目標を基に進めていく。          スキルベースでは、書き言葉で構成を意識して書くこと、概念ベースでは、多様な視点から「自分自身」について考えを深めることが目標になっている。</p>			
6. 単元計画（全 時間）				
	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1~2	基礎理解	単元、教材などの基礎理解	導入：発問①「自分と異なる背景を持つ人たちにかかわった時、その人たちに対して嫌な気持ちを抱いたことはありますか？ また、それに対しどのように対処しましたか？」 ・教材の「はじめに」と、p 1 2 ~ 2 4 を読む →（基礎理解のため）ワークシート穴埋め	ワークショップ資料  <b>『ふるさとして呼んでもいいですか？ ~6 歳で「移民」になった私の物語~』</b>  →この本（随筆）をテキストとして使い、単元を進めていった
3~4	文化とは①	アイデンティティや文化について考える	p 8 6 ~ 9 1 を読んだ後、p 1 1 1 ~ 1 1 3 を読み、「文化」とは、また、人が持つ「違い」について考える  →Google slide, Pear deck を使い、皆の考えを共有する	
5~7	文化とは②	アイデンティティや国籍、文化について考えたことを論述する	p 1 6 6 ~ 1 7 0, p 1 7 6 ~ 1 8 0 を読み、国籍とは何か、またそれがあることによる利点、欠点を考える →共有し、違いと向き合いながら考えを深める  <b>課題①</b> 文化とはどのようなものか。自分の考えを述べましょう。 ・意味段落の分け方 ・序論・本論・結論の分け方	

8~9	偏見とは①  本時	偏見について考える	p 1 2 7 ~ 1 2 9 を読む <b>発問</b> ：自分が持っている「大多数の何か」に対する偏見を挙げてみましょう(人に限らずモノ、動物、国でも ok) →共有し、人が偏見を持つ際の共通点は何か考える。
10~12	偏見とは②	偏見について考えたことを、構成を意識して論述する	p 1 7 2 ~ 1 7 6 を読む 発問：人は自分にとってどのような人、モノ、コトに対し偏見を持つのだろうか →共有し、違いと向き合いながら考えを深める  課題② 人はなぜ(どのようにして)偏見や差別意識を持つのだろうか。自分の考えを述べましょう。 ・意味段落、形式段落の違い ・主張を強調させるための根拠の述べ方 ・主張に対する根拠の示し方
13~15	最終課題	学んだこと、考えたことを言語化し、構成を意識して論述する	・多文化社会において、様々な背景を持つ人たちと生きていくうえで自分自身が重要だと感じる考え方について述べましょう。

7. 本時の展開 (8時間目)

本時のねらい：

- ・「偏見」の本来の語義と、私たちが日々使う文脈の中での「偏見」という言葉について見つめ直す。
- ・また、生徒内で偏見を持った経験、持たれた経験を共有し、「私たちはどのようなときに偏見を持ってしまうのか」について考える。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料(教材)
-------	----------------------------	-----------------	--------

<b>導入</b> (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 偏見に対するイメージを自由に書く</li> <li>・ 偏見、ステレオタイプ、差別の違いを確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 例を自分から2つほど共有する</li> </ul>	オンライン掲示板
<b>展開</b> (30分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体験談を共有する</li> <li>①自分が持っていた偏見</li> <li>②「実際は～～だった」ということを〇〇を通じて知った</li> <li>③何があったか、詳しい説明</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ①②③と一つずつ、出てきた回答の幾つかに対してコメントし、他者の視点、経験を得られる機会にする</li> </ul>	<b>【Pear Deck】</b> をグーグルスライド内に用意しておき、生徒たちはそこへ打ち込む。  本活動内の書く作業は、手書きではなく、スライド <b>【PearDeck】</b> へ打ち込む。
<b>まとめ</b> (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「私たちはなぜ偏見や差別意識を持ってしまうのか」について考えたことを共有し、自分なりの考えを持つ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6人グループに分け、最初の数分は各自で考え、それらを共有し、更に考えを深める</li> </ul>	

8. 評価規準に基づく本時の評価方法  
・ 本時では、評価対象となる活動はない。

9. 学習方法及び外部との連携  
他者との共有、大泉町の紹介

10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組  
次年度以降もアイデンティティについて国語科で扱う予定。

**【自己評価】**

<b>11. 苦労した点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学一年生に「アイデンティティ」や「文化」について自発的に考えるための問いを用意すること</li> <li>・ 途中途中で、どこか「教員側が答えてほしい回答」を求めてしまうことがあった。その際は単元の目的や評価規準をそれぞれ何度も読み返した。</li> <li>・ パソコンとプリントの両立。特にパソコンに打ち込む際は、その文言をプリントに書くべきかどちらでも構わないか、それぞれ明確にできていない場面が幾つかあった。</li> </ul>
<b>12. 改善点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 問いに対して生徒各自考え、その考えが発展した後、ディスカッションをする場をもう少し多めに設けるべきであった。</li> <li>・ 問いを出してから、生徒たちがなるべくつまづかないよう試行錯誤して問いを作成していたが、敢えてつまづかせる問いを用意してもよかったのではないかと強く感じている。</li> </ul>
<b>13. 成果が出た点</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単元、各課題内でのゴールを明確にしたことで、振り返りをした際、新たなスキル、視点や考え方を得られたと実感している生徒が多数いた</li> <li>・ 生徒たちの考えを匿名で全員が見られるようにしたところ、頭を抱え、真剣に問いに対し考える姿勢を見せる生徒が心なしか普段より多く見受けられた。</li> </ul>

## 課題①：文化とはどのようなものか

### 14. 学びの軌跡 (児童生徒の反 応、感想文、作文、 ノートなど)

一般的に文化とは、各国に存在する「概念的な文化」と、世界中の一人ひとりに存在する、それぞれの「個人的な文化」として分けられると思うが、私が考える文化とは、個人の信条が存在すると考えている。つまり、文化とは、個人個人が自分の信条を持って守っているものだと考える。

ナデイ(テキスト内登場人物)の国では、国民のほとんどがイスラム教を信じており、その中で服装が原則として決められている。女性は長袖長ズボン履き、髪の毛を隠すのは絶対である。

学校内でも、スカーフを被っている外国人を見たことがある。彼女の国で定められた原則であり、守らないといけないという信条があるからだ。それに比べて日本では、たとえ半袖半ズボンの服装でも自由だったこともあり、初めてそのような文化を持つ人を見たときは、少し偏見のな視点を持っていた。

しかし、今回、各国には一つひとつ違う文化があり、文化を守っているということは、自分の信条があるからだと思いついた。それについて私は、二つの疑問点がある。

一つ目は、ナデイは、小さい頃、イスラム教について何も気にせずに、周りの生徒達と同じ様にしてきたのにもかかわらず、どうして彼女が成長していくに連れ、気にするようになったのか、ということだ。

ナデイの国の人々が守っているからという影響もあると思うが、その他に、ナデイ自身の信条が芽生えていたのではないかと考えている。それは、彼女が成長していく過程で段階的に作られたものだと思う。

私も、同じような体験をしたことがある。小さい頃は、何も気にしていなかったことを、成長するに連れて、気にするようになったのだ。成長の過程で、色々な経験を積み重ね、沢山のことを学んだことで、今では他人に左右されるのではなく、自分自身の信条で何かをするようになったのだ。これと同じ様に、ナデイが自分で正しいと思ったことをするようになったのだと考える。

とはいえ、わざわざ日本に来てまでその原則を守らなくても大丈夫では無いかという疑問が湧くであろう。実際、その決まりを守らなかつたところで、それを咎める人もいないはずだ。

だが、自分の信条として考えているものは、どこにいてもどんな時でも、守らないと気がすまない気持ちになると思うのだ。なぜならそれは、私が実際に、自分の信条に対して、同じような感情を持っているからだ。

例えば、私は人の悪口を言えない。それは、誰かに対して、罪悪感を感じているからだ。悪口を言うことは、自分がどこに居ても、どんな時でも、自分が言おうと思えば物理的には可能なことだが、ナデイと同じように私が信条と考えているものに対しては、何かもやもやするような不満な感情が芽生え、どうしても出来ないのだ。

つまり、概念的な文化や個人的な文化には、どちらも個人の信条が存在し、自分の信条として考えていることは、段々と自分の経験を積み重ねる過程で出来上がったと分かった。個人の信条は、他人に左右されたものではなく、自分自身が作り上げたものであるため、他人が出来たとしても、自分はなかなか出来ないものだと考える。

**最終課題：多文化社会において様々な人たちと生きていくうえで自分自身が重要だと感じる考え方について述べましょう。**

様々な人種や文化、環境などを自分や身近なものと比較せずに尊重し合うことが多文化社会において様々な人たちと生きていくうえで最も重要だと感じる考え方だと私は考える。

そのように考えた理由は二つあり、これから例を用いて詳しく説明していく。

一つ目は、人々は特定の二つのものを比較することによって偏見や差別意識を持つていると考えているからである。

人々がなぜ偏見や差別意識を持つているのだからとよく考えてみると、それは疎遠なものを身近なものと比較しているからというところが共通点として挙げられる。そのように比較するからこそ、人を偏つけるような偏見や差別が多く生まれる。ここで、男女差別と言語差別の例を用いて詳しく説明する。

男女差別とはその人が持つ性別によって差別を受けることである。男女差別として世界中で大きな問題となっているのが男女間での教育格差である。アフリカ大陸の国々では、「女子は家庭の仕事をするため、教育は必要ない。」という差別が長らく続いていて、今でもその差別が残っている。これにより女性就学率は男性就学率を大きく下回っている。この差別は、男子と女子を比較することによって、将来、どちらが高い地位に就けるかによって男女間の差別を生んでいる。次に言語差別の例を用いて説明する。

言語差別とは言語の違いによって生まれる差別や不平等のことである。外国人に対するいじめは言語差別である。

日本で起こるいじめを例に説明する。日本語を喋ることのできない人を見ると、日本人は自分のほうが有利な地位にいると思ひ込み、結果的にいじめに繋がる。卑劣な言葉を投げかけられ、暴力なども起こる原因となる。これは言語差別であると同時に一種の人種差別でもある。日本語を喋れる人と日本語を喋れない人を比較して、自身の中で地位向上をして、日本語を喋れない人に対していじめなどといった差別をしている。

男女差別と言語差別という二つの例のように人々は特定の二つのものを比較する傾向があり、それが偏見や差別意識を生んでいるのだ。だからこそ、様々な人種や文化、環境などを自身や身近なものと比較しないようにすれば、偏見や差別意識が生まれることはなくなるのだらうと考えた。

二つ目は、そのような考え方が多文化社会において様々な人たちと生きていくために一番早く実行できるからである。現在、多文化共生社会を実現するために様々な国や自治体が様々な活動を行っている。ここでも国や自治体が行っている活動や支援を例として用いて説明する。

日本の政府は外国人向けの生活支援や日本語学習支援など、人種差別や言語差別などと言った内面から与えられる差別をなくそうと取り組んでいる。近年、日本の大学などでも外国人が入学するための「特別選考」という枠が設けられている。これらの背景にあるのは疎遠なものと身近なものを比較せずに、お互いを助け合っているということである。

しかし、これらは全て内面から与えられる差別や偏見をなくするための取り組みだと言える。政府や自治体は外見から与えられる差別や偏見をなくするために何かに取り組むということはできない。なぜなら、それは私達の勝手な思い込みによってできあがっているものだからである。お互いを尊重し合うことは強制されてできるものではない。

そのため、自分たちが意識的に行うことが必要となってくる。一人ひとりが疎遠なものを身近なものと比較しないようにして、尊重し合うことは意識的に行えば、誰でもできるものであり、国や自治体が動くよりも早く実行できる。

多文化共生社会を実現させるためには私達人間が一人ひとり意識的に尊重し合うことを頭に入れて生活する必要があるのだ。

これまでに多文化社会では比較せずに尊重し合うことが大切だという考え方の理由を二つ説明した。近年、差別に対して多くの人が考えを持つようになり、差別をなくすために色々な行動が起こっている。

しかし、世の中には未だに様々な差別が残っており、それらに共通して言えるのは疎遠なものと身近なものを比較しているということだ。また、それをなくすために多くの人や国、自治体などが動いているが、一番早く解決できる方法は私達一人ひとりが意識的に比較せずに尊重し合うことである。

様々な人種や文化、環境などを自分自身や身近なものと比較せずにお互いを尊重し合うことが多文化社会において様々な人たちと生きていくうえで最も重要な考え方である。

<p>15. 授業者による自由記述</p>	<p>今回の研修に参加させて頂き、自分自身何度も何度も向き合う場面が多くあった。参加前の自分を振り返ってみると、「SDG s」や「多文化共生」など、聞いたことはあったが、実際そこにどのような人がどのような想いをもって関わっているのか、想像することすら難しく感じていた。しかし、今回の研修で実際に現場へと足を運び、そこで生きている人の生の声、叫びを聴くと、言葉にならない感情に押しつぶされそうになると同時に、「これが知るといことだ」と大事なことを再確認できた素晴らしい機会となった。</p> <p>やはりSDG sなど、社会問題について授業内で取り扱ううえで重要となってくるポイントは「いかに自分事として捉えるか」であると考えている。</p> <p>そのように「自分事化」を生徒の中に現象化させるには、自分がその姿勢を見せ続けることと、そういったことを考える機会を日常から多く設けることが大事なのではないだろうか。</p> <p>前述したとおり、本単元で多文化共生について考える機会が終わったのではなく、本単元をファーストステップとして、次年度以降も積極的に取り組んでいきたい。</p>
-----------------------	--

使用した教科書・単元名：

参考資料：

①著者、ナディ 解説、山口元一

ふるさとって呼んでもいいですか～6歳で「移民」になった私の物語～ 大月書店

②著者、佐藤真久 広石拓司

SDG s 人材からソーシャル・プロジェクトの担い手へ みくに出版

※ 過去の本研修参加教員による実践事例と使用教材、ワークシートなどを JICA ホームページに掲載しています。是非ご覧ください！

<https://www.jica.go.jp/tokyo/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html>